

## 陳述書（４）

原告 槌田 敦

### 1、編集委員会の掲載拒否の判断の前提事実について

被告の機関誌「天気」編集委員会は、私の論文を掲載拒否するにあたって、次のように述べました（甲10号証）。

《原稿では、数年スケールの変動において、気温変動がCO<sub>2</sub>の変動よりも先行する(位相が進んでいる)ことが指摘され、これを根拠にして、長期的なトレンドにおいても気温上昇がCO<sub>2</sub>増加の原因であるとの主張がなされておりま

す》（1頁下から10行目以下）。

つまり、「数年スケール」という短期間の変動を分析して得た結論をそのまま長期間の変動の結論としている、というふうに私の論文を理解し、それを前提にして掲載拒否理由が述べられています。

しかし、私の論文（甲4号証）は、論文に添付された図を見ていただければ明らかなように、端的に長期間の変動を分析したものでして、「短期間の変動を分析して得た結論をそのまま長期間の変動の結論としている」というものでは全くありません。それは、以下に解説するとおり、論争の余地など全くない明らかな事実です。

### 2、その理由

私の論文（甲4号証）に添付された図（甲4号証では図は甲3号証と同一なので添付を省略しましたので、ここでは甲3号証の第5図を見ていただければと思います）に示しましたように、図の横軸には1969年から2003年までの35年間という時間を取り、この「35年間の全体」について、気温のデータ（35年間）とCO<sub>2</sub>濃度の変化率のデータ（34年間）を比較しました（本陳述書に甲3号証の第5図を添付しましたので参照下さい）。

なおかつ、その比較に際しても、気温の高いところだけとか、または低いところだけとか、これを「部分に分けて」、短期間の変動を論じておりません。あくまでも「35年間の全体」についての変動を論じています。

これだけ申しあげれば、私の論文（甲4号証）で分析した「35年間の全体」についての変動が、「天気」編集委員会が言う「数年スケール」という短期間の変動に当らないことは十分お分かりいただけると思います。

この説明に対し、もし被告から反論がありましたら、ご指摘いただければすぐに回答したいと思います。

以上、陳述いたします。

2010年 1月18日

東京地方裁判所民事第44部 殿